

明治31年青森町における政治家ネットワークの研究

— 政党派閥における人間関係濃淡の数値化の視点から —

南 勉[※]

要旨：

明治30年における青森町議会議員個人のもつ人間関係の濃淡を数値化し、政党派閥のもつ結束の強弱に変えて、その数値と順位を具体的に示したのが本稿の趣旨である。

議員である政治家の、企業家としての人脈の強さの数値を議員の共有項に加えて、政治の派閥の絆の深さを数値化している。

結論として、人数だけの派閥の力関係は、要素ネットによる派閥間の絆の深さを反映した力関係とは異なることが示された。

キーワード：準ネット、要素ネット、定義の拡張、政治家共有項

The research on political faction networks in the Aomori city 1898: from a viewpoint of digitizing the political party factions

Tsutomu MINAMI

Abstract：

The definition of the element net was extended with improvement in this paper and the human relations of politicians were replaced with the strength of the factions of a party. So they were drawn by an element net in conclusion.

This report means the powers of politics in the Aomori city 1897 and it was calculated in an element net not a number.

はじめに

地域社会研究科年報第11号の論文で、人間関係の濃淡を計測するための基本的な考え方を述べたが、ここではこの考え方を用いて、青森市制開始前後の町議会における政治家間の人間関係の濃淡を、数値化して具体的な人名で述べてみたい。

年報第11号で展開した企業家ネットワークに登場した人名が、ここでも多く見られたのは、当時の企業人達が積極的に政治に参画していた証左と思われる。

年報第11号でも述べたが、人間関係を示す要素ネットとは「行列マトリックス」で示される。ここでも、この図表を核として、人間関係濃淡の数値関係が計算される。

[※] みなみつとむ 弘前大学大学院地域社会研究科客員研究員 博士(学術)
minami.t@blue.ocn.ne.jp

本稿の最大の特徴は、明治30年青森市議会の派閥別勢力図を3段階に分けて単純な「数」の分布から、人間関係の濃淡を加味した「重さ」の勢力図まで、数値で明らかにしたことである。すなわち、30名の議員の派閥別割合がまず「人数」で示され、それらの「人数」が定義の要素ネット別に示され、最後に企業家議員のもつ個人的絆の「重さ」が加味されて、「人数」だけの分布とは程遠い意味のある人脈勢力図に仕上がったことである。

第1章で「数値化」の定義を述べている。第2章で明治中期の青森町から青森市へかけての、政治状況の歴史的展開過程を述べている。第3章では、要素ネットをツールに30名で構成する市議会の勢力分布の様子を述べている。そして最後に、要素ネット分析のもたらした人脈形成の面白さについて述べている。

本稿での研究手法は先行研究が無い。「要素ネット」を利用して、全く新しい人的ネットワーク分析へのアプローチを試みている。ご批判ご指導を賜りたいと思っている。

第1章 定義と意味

まず、政治家ネットワークとしての「列」と「行」の定義と、その意味を述べてみよう。次に、政治家間の要素ネット数を計算し、人脈の形成とその濃淡を明らかにしよう。

最後に、明治中期青森町の政治的な勢力分布と、議会の構成を明らかにしよう。

1. 政治家ネットワークにおける「行」と「列」の定義

企業家ネットワークでは「行」に企業家名と「列」に2者間の共有事項をとったが、政治家ネットワークにおいても同様に、「行」に政治家名、「列」に共有事項を取り上げる。

すなわち定義として、

「行」の定義

「同じものを共有する二人の人物が、何組あるのかの基本になる一組を「行」の1要素ネットと定義する」

「列」の定義

「二人の人物が共有する同じものが、何組あるのかの基本になる一組を「列」の1要素ネットと定義する」

「ネットワークの要素ネット」の定義

「(行)のもつ要素ネットの組合せ数と、(列)のもつ要素ネットの組合せ数の二つを加えた合計要素ネット数を、ネットワークの要素ネットと定義する」

政治家ネットワークにおける「列」の共有事項にはどんなものがあるか

同じ時期の議員、市会、町会、村会、委員会、

同じ党派閥、〇〇党、〇〇派、〇〇閥(学閥、閥閥等、士族平民)、〇〇族、〇〇組、趣味、

企業家ネットワークの 役員、出資等

本稿の政治家の共有事項

本稿では、明治30年の青森町のもつ資料の限界性から、既に計算済みの企業家ネットワークの共有事項と、資料として存在する議会派閥としての共有事項を用いた。

ここでのネットワークの要素ネット数とは、企業家としての要素ネット数と、政治家としての要素ネット数（「列」の組合せ数は派閥だけの1）を加味したものである。

2. 政治家ネットワークにおける「行」と「列」と要素ネットの意味

「行」の意味

ここでの「行」の組合せの意味とは、派閥の中の二人の組合せが何組あるかという事である。二人の政治家の間だけの関係だから、誰と誰がどんな考えを共有して、どんな派閥に属しているのかだけを意味している。信念信条が同じかも知れないし、単なる打算かもしれない。同じボスか、異なるボスに誘われたのかも知れない。また、誰か第三者への従属を意味しているのかも知れない。

「列」の意味

ここでの「列」の共有項は議員のもつ政党の派閥と、企業家議員のもつ企業家ネットの共有項の合計である。すなわち、政党派閥は議員のもつ共有項の一つであると解釈している。したがって、企業家議員の共有項は企業家ネットの共有項に議員ネットである「派閥」が加わり、企業家議員であっても企業家の共有項をもたない議員は、「派閥」だけが共有項となる。

一つの「列」だけの意味

要素ネットの定義は、二人が二つ以上の共有項をもつことだが、一列だけの二人の組合せとはどんな意味をもつのだろうか。

本稿の政治家ネットでは、企業家議員はいずれかの派閥と企業家としての共有項から2列以上になるものの、企業家ネットの無い議員は政治家としての「派閥」だけの「一列」の共有項になる。この場合の「行」の組合せの意味は、どんな意味となるのか。

これは、二人の議員が同じ派閥を共有している関係の頻度の問題で、この「派閥」の議員間関係の濃さ、深さの数値化と言っていい。したがって、大坂閥は11人だが、二人同士の関係は55の組合せがあり、単なる人数11人とは異なる意味を有する。

定義の要素ネットは形成し得ないが、この「55」は意味のある数値なので、要素ネットと呼ばず「準ネット」とよぶことにする。一人の「準ネット数」は組合せ合計の人数分の一で、大坂閥の場合は55の11分の一の5となる。

「ネットワークの要素ネット」の意味

企業家の場合と同じくこの数字は、この人間集団がもつ全ての二人の組合せの人間関係の、個人毎の濃淡の数値を指している。すなわち、誰と誰がどんな絆で結ばれたグループで、その絆の強さはどれほどかという度合を、デジタルな計量価値で示している。

第2章

明治中期（青森市制端緒期）における「政治家ネットワーク」と市政

1. 明治31年 青森市政初の市議会議員選挙

青森市制がスタートしたのは、明治31（1898）年、初代市長工藤卓璽からである。初代市長工藤卓璽は青森町々長から市制施行と同時に市長として選ばれ、約2年半におよぶ任期を勤め、衆議院議員として立候補するために職を辞任した。

明治34年の法改正により、青森市は人口3万人以上の都市として、一名の衆議院議員を選出する独立選挙区の資格を得たからである。工藤市長は国政への参画を志したのである。

工藤市長は職を辞するにあたり、2代目青森市長として当時、弘前市に帰郷したばかりの探検家、笹森儀助を指名した。推薦理由は、一党一派に偏せず公平無私、剛毅正直で氏をおいて他に適当な人物はいない¹⁾ というものであった。笹森新市長が誕生したのは、翌年の明治35（1902）年4月の市長選挙、5月の内務大臣裁可によってである。

当時、中央政界では相反目していた自由、進歩両党が合併して明治31年6月17日、憲政党を結成、この憲政党も明治33年憲政本党と立憲政友会に分裂、山形有朋長州藩閥政府に対抗した伊藤博文の立憲政友会が政権を掌握、明治34年の総辞職まで続いた。

当時の青森県政、青森市政の様子は、下記のごとくであった。

青森県は憲政本党が圧倒的に強く、菊地九郎、工藤行幹、奈須川光宝、徳差藤兵衛の4人の代議士を擁し、県会でも多数派であった。しかし、以降の県政市政混乱の原因となったのは、つぎの事実からはじまる。すなわち、この4名の代議士は、明治34年の地租の増税に反対して同党を脱党、県内では青森県進歩党と称したのである。

従来の青森町議会は、政党の色合いというよりもむしろ、実業派と称する経済界の重立で占められていた。この中核となっていたのは、淡谷清蔵と大坂金助、渡辺佐助である。

明治31年の新市議会選挙は、この実業派に抗して新たに勢力を増大しつつあった「有志派」と称する、上田幸兵衛、柏原彦太郎、川口栄之進を中核とする市政革新を称えた一派との一騎打ちであった。上田幸兵衛も柏原彦太郎も実業人であったが、なぜか川口栄之進という「正義派」を振りかざす弁護士との提携による、市政刷新運動の先頭に立っていた。

新聞の論調も真二つに分かれ、「有志派」を推す「東奥日報」と、「実業派」を推す「陸奥日報」との間には、熾烈な論戦が交わされていた。

「有志派」は30名の推薦候補者を決め、東奥日報に何度もその氏名を広告し選挙態勢を固めた。一方「実業派」も31名の推薦候補者を決め、万全の体制で選挙戦に臨んだ。

この両派の候補者は13名も双方にダブっており、その色が鮮明でなかったが、これらの13名は全員連名で「陸奥日報」に、「「有志派」の推薦とは無関係である」と載せたのである。²⁾

結果は「実業派」の圧勝に終わり、定員30名の内「実業派」は27名当選、「有志派」の当選は2名に過ぎなく、双方からの推薦のなかった福士佐七郎が1人当選しただけであった。

当時の新聞の、互いにおける個人攻撃の悪口雑言は激しく、いまでは考えられない様相であり、市議会が大坂金助を主体とする「政友会」系と川口栄之進を中心とする「憲政党」系に分別したのは、このときに萌芽したものであると、「青森市議会史」は述べている。

ここで気付くのは、「中立系」として分別されている「淡谷系」のことである。この選挙を機に、青森市の政界は「淡谷系」と「大坂系」が提携し、「実業派」が断然優勢になったと「青森市議会史」は述べている。

もともと「企業家ネットワーク」でみるかぎり、この両派には大きな対立はない。青森電灯の会社設立または火力発電増資においても、青森倉庫、青森貯蓄銀行設立においても協調的であった。明治33年4月に没した2代渡辺佐助の調整が大きかったと言われているが、経済行動における対立は以後もみられない。両派の対立とは、政治的側面においてであり、経済的側面での対立は、ほとんどなかったと思われる。宗教、政治の対立と経済対立は異質なものであり、この場合、政治的立場さえも協調的であったという側面は興味深い。

明治35年、陸羯南から笹森儀助市長に宛てた笹森儀助書翰集のなかで、羯南が次のように述べている。「…市政への党派切り込み候は全国至るところの弊害、幸に青森は是まで全く党派の毒を受けず、市政は市の良民のみ関係いたし候ことなれば、……」と述べ、「……因って愚考には、この際市の有力者は断然と工藤、徳差兩人を排除して、さらに淡谷、大坂兩人のうちを候補とすること、急要と考えるべく候……云々」と結んでいる。

これは、独立選挙区となった青森市が、代議士選出の資格を得て候補者を選定する際の、陸羯南の思惑である。市長である笹森儀助宛ての、候補者の選定は党人でない実業派の、淡谷清蔵か大坂金助を推薦してほしいという依頼である。市政が党人によって他都市のように毒されておらず、市の良民のみ関係していると言っているところが面白くもおかしい。

このように外からみれば、政治的にも実業派は一体であると評価されていた。これは、「人脈」とか「ネットワーク」という‘人的繋がり’には、政治と経済の間の本質的な差異が存在することを示唆している。「実業派」には、川口栄之進を核とする「有志派」という、強力な対抗者が存在していた。

明治31年のこの選挙以降、両派はことごとく対立、明治36年の大坂金助「バカヤロー」発言に象徴されるごとく、両派は益々溝を深くしていった。

市政最初の市議会は、淡谷派と大坂派が一体であると解釈するならば、大坂系「実業派」の21人は圧倒的な勢力であり、これに対し、「有志派」の川口栄之進他の5名とは、実に少数派だったわけである。

2. 明治30年議員一覧表の示唆するもの

表1は、政治家個人の属性に加えて、政治家の共有事項と過去現在未来の立位置の変転を記したものである。この表で、政治活動の経年の動きが掴めると思う。

今回は市議会議員のみの記載であるが、この時代は村町市議会議員から県議会、首長等に移動するケースも多く、一覧で個人の経歴と人間家関係を表現すべく意を用いた。

明治31（1898）年における青森市の市会議員30名のうち、職業欄が空欄になっている不明の分をのぞけば、ほぼ全員が当時の商店主すなわち企業家の類に属する人たちであった。それも旧市街地の商店街に位置する、大町、安方、米町、博労町、蜷貝等、商店密集地帯の商家のご主人たちである。

ということは、それだけ市政と商人たちとは不可分に繋がり、青森市の場合企業家とは商店主を指し、かれらがこれまでの町政、明治31年以降の市政を主導していたことを意味している。

表1 明治31年 青森市会議員一覽表

no	政治家個人属性								政党			派閥			過去、現在、未来実績								
	議員名	所在地	生年	没年	享年	明31年 年齢	職業	屋号	政友会	進歩党	諸会派	有志派	淡谷派	大坂派	首長			議員					
															村長	町長	市長	村会議員	町会議員	市会議員	県会議員	国会議員	
1	浅田八百八								政					大							現		
2	池野健吉	青森市安方町					米穀商荒物卸	〇久	政					大								現	
3	石館喜久蔵																					現	
4	伊藤善五郎	青森市	安政5	昭和3	70	40	船問屋	滝屋					淡									現	
5	今村勝三郎	青森市安方町					米穀商肥料商						淡									現	
6	大坂金助	青森市博労町	弘化2	大正14	80	53	清酒 酢醸造	一丁	政					大								現	
7	大沢嘉七	青森市柳沢遊郭					貸座敷	大二	政					大								現	
8	柏原彦太郎	青森市博労町	天保14	明治40	64	55	清酒酢醸造	一与		進		有										現	
9	加藤市郎	青森市大町					呉服太物	山力	政					大								現	
10	鎌田嘉助	青森市米町	万延元	明治37	45		行商菓子工移出	カネカ					淡									現	
11	川口栄之進	青森市寺町		明治33			呉服太物	一〇		進		有										現	
12	川崎助次郎												淡									現	
13	北谷竹次郎																					現	
14	木村円司											有										現	
15	小林長兵衛初代	青森市	安政2	明治43	52	43	米穀商						淡									現	
16	澤田惣兵衛								政					大								現	
17	田中藤次郎																					現	
18	淡谷金蔵												淡									現	
19	淡谷清蔵5代	青森市安方町	弘化3	大正12	77	52	呉服太物	大世					淡									現	
20	中島又吉	青森市浜町					飴製造	又上	政					大								現	
21	中西末太郎	青森市米町					小間物	〇一	政					大								現	
22	中村与助初代	青森市大町											淡									現	
23	長谷川茂吉	青森市博労町	嘉永6	明治44	58	45	醤油醸造呉服		政					大								現	
24	原子伝次郎									進		有										現	
25	樋口喜助	青森市大町	安政3	昭和8	77	42	小間物卸	一寿					淡									現	
26	平井重次郎								政					大								現	
27	福士佐七郎	青森市舘貝町					米穀商肥料商	八十一														現	
28	三上栄蔵									進		有										現	
29	安田磯太郎													大								現	
30	渡辺議助	青森市大町					呉服太物古着						淡									現	

「青森市議会史」より作成

それにしても、商店主たちの市政進出はすさまじいばかりである。いかに、当時は職業自体がそれなりに限られていたとしても、これほど積極的な市政参加は、奇異とみえるほどの現実である。商業を主とする新興商業都市の特性とっていいのかもしれない。

明治22年、25年、28年と続いた町議の就任状況をみても、これとほぼ同じ傾向であり、新市政に参加した市会議員たちのほとんどは、町会議員の延長線上での就任となっている。

市会議員の業種が増えるのも、都市の発展とともに変化した、大正、昭和期に入ってからといえるだろう。表1の派閥人名を見やすくしたのが次の表2である。

表2 明治30年 青森市議会派閥議員名一覧

政友会			中立系			進歩党			不明		
大坂派の議員準ネット (組合せ数)			淡谷派の議員準ネット (組合せ数)			有志派の議員準ネット (組合せ数)			不明の議員名		
1	大坂金助	5	1	伊藤善五郎	4.5	1	川口栄之進	2	1	石館喜久蔵	0
2	長谷川茂吉	5	2	渡辺議助	4.5	2	原子伝次郎	2	2	北村竹次郎	0
3	池野健吉	5	3	小林長兵衛初代	4.5	3	三上栄蔵	2	3	田中藤次郎	0
4	浅田八百八	5	4	淡谷清蔵5代	4.5	4	柏原彦太郎	2	4	福士佐七郎	0
5	大沢嘉七	5	5	今村勝三郎	4.5	5	木村円司	2	5		
6	加藤市郎	5	6	鎌田嘉助	4.5	6			6		
7	澤田惣兵衛	5	7	川崎助次郎	4.5	7			7		
8	中島又吉	5	8	淡谷金蔵	4.5	8			8		
9	中西末太郎	5	9	中村与助初代	4.5	9			9		
10	平井重次郎	5	10	樋口喜助	4.5	10			10		
11	安田磯太郎	5	11			11			11		
準ネット計			55	準ネット計			45	準ネット計			10
								準ネット計			0

青森市議会史 青森市商工人名録 青森実地明細絵図から作成

3. 市議会のもつ派閥の組合せ数

ここで、派閥の分布が全体に占める割合の意味として、単なる議員数の分布と、派閥のもつ「組合せ数」の分布の意味の差を再度述べたい。

議員数の「数」だけの比較では、単なる多数決に必要な大小の差に過ぎない。「組合せ数」では、人間関係の「質」的面が増幅強調されている。

政治家派閥の視点からみたととき、「組合せ数」の方が単なる「数」の表現との比較よりも優れている気がする。しかし、後述する要素ネット数はもっと「重み」を反映する。

明治30年青森市議会の勢力分布は、数では大坂派が30名中の11名、淡谷派が10名、進歩党の有志派が5名で、不明が4名となっている。

人数だけの計算だと不明を除外したとき、それぞれ42.3%、38.5%、19.2%の合計で100%だが、組合せ比較（一列なので定義の準ネット）に換算してみたらどうなるのだろうか。

30名の総組合せ数は二人一組が435通りである。大坂派は11名だから、この総組合せ数は55である。淡谷派はどうだろうか。10名だからこの総組み合わせ数は45となる。

進歩党の有志派は5名だから組合せ総数は10となり、合計組合せ数は110である。

それでは、435のうちのこの110以外の325通りの組合せとは、一体何だろうか。

これらの325通りの組合せとは、二人の人物は派閥が異なり「議員」という一つの共有項以外に共有項が無く、組合せ数が意味をもたないのである。

すなわち、同じ町の商人であっても議員だという繋がりだけがあるに過ぎない。したがってここでは、これらの325組は深く考えないでおこう。

「派閥」の二人が絆をもつ組み合わせ数（不明6を含む）は3派計で110だから、この数字に対する各組合せ数が全体に占める割合を考えてみよう。ただ単なる「数」のときの割合に比較して、二人の組合せの絆をもつ110を全体としたときの各割合はどうなるだろうか。

表3 明治30年 青森市議会勢力の人数と組合せ数の比較

明治30年 青森市議会	派閥の人数	派閥の 組合せ数	全体への割合	
			人数	組合せ数
派閥名	30	435	%	%
大坂派	11	55	42.3	50.0
淡谷派	10	45	38.5	40.9
有志派	5	10	19.2	9.1
(不明)	4	6(除外)		
合計	30	110	100	100

青森市議会史 青森市商工人名録 青森実地明細絵図から作成

大坂派の組合せ数は55だから、110に対しては50%である。淡谷派の45は同様に40.9%である。進歩党の有志派は5名のネット数は10だから、9.1%である。

(不明の組合せ数は考えない)

単純人数の割合比較と組合せ数比較の差の意味

この違いは、市議会の勢力分布を単なる静的構成比で分けた数の割合比較と、一列組合せ数(準ネット)がもつ動的な質的計量値との意味の違いを、ハッキリと表している。

それは、二人の人間関係がもつ質的なもの、絆の濃さ強さを勢力図に加味して表現しているからである。

この表から気付くのは、大坂派と淡谷派の組合せ数のシェアが人数シェアより高くなり、人数シェアが低い有志派の組合せシェアが逆に、人数シェアより低くなることである。これは、何を意味するのだろうか。

人間関係の絆の強さ濃さの「質」を問題にしたとき、人数だけのシェアは単純に、数字の大小関係だけの占有率を表しているが、組合せ数は「高い」も「低い」も増幅強調されて、「重さ」を勢力図の中に映しだしていると言えるだろう。それにしても進歩党有志派の、人数では19.2%のシェアが二人の組合せにした途端、一桁の9.1%まで低下するのは驚きである。

人数だけのときと組合せ数では、影響力がこれほどにも増幅されていれることを示している。

第3章

政治家ネットの「要素ネットワーク」

1. 明治31年における「企業家ネットワーク」

前述のように、政治家の要素ネットは政治家固有のネット数と、企業家固有のネット数(企業家が議員であれば)を加味したものである。

明治30年の青森市の場合、30人の議員のうち11名が企業家ネットワークに属する議員である。30名の殆どが商人であるが、そのうちの11名だけが定義の起業家要素ネットを有するという意味である。

まず、議員だけがもつ企業家ネットワークを考えてみよう。

この時代の青森市政を論ずるに、「企業家ネットワーク」の果たした役割は計り知れなく重い。弘前市と異なり士族は極端に少なく、平民の商業者や農業者、漁業者等の人達が活発に政治に参画し、すでに商業都市の観を呈していたからである。

従って、企業家の要素ネットの形成は進んでおり、企業を土台にした人間関係の結びつきも強固で、

地域の産業開発による企業開発が弘前市よりも、一歩先んじていたのも納得できる。

結果として、渡辺佐助、淡谷清蔵、大坂金助の三大グループが早くから形成され、時代の進むにつれて水産関係の新興勢力の勃興をみることになる。

このことは、「論文、明治大正昭和初期における企業家ネットワークの研究」で、仔細に論じられているため、グループの要素ネット数も細かに述べられている。

表4 明治30年 青森市議会企業家議員のもつ要素ネット数

明治30(1897)年 青森町	企業家共有項						政治家共有項			企業家ネットをもつ人物の、 市会議員要素ネット数								合計
	役員						政党			1	2	3	4	5	6	7	8	
	青森電灯	青森倉庫	青森商業銀行	青森銀行	青森貯蓄銀行	青森精米	政友会 (大坂派)	進歩党 (有志派)	中立系 (淡谷派)	大坂金助	長谷川茂吉	伊東善五郎	渡辺儀助	小林長兵衛	淡谷清蔵	木村円司	柏原彦太郎	
1 大坂金助	取	取	頭		取		大			10	1	1	3	3	1	0	19	
2 長谷川茂吉	取	取	取		監		大			10		1	1	3	3	1	0	19
3 伊藤善五郎	監			取	取			淡		1	1		6	3	6	0	0	17
4 渡辺儀助	取			監	取			淡		1	1	6		3	6	0	0	17
5 小林長兵衛初代	監	取			監			淡		3	3	3	3		6	0	0	18
6 淡谷清蔵5代	取	取		専	取			淡		3	3	6	6	6		0	0	24
7 木村円司	取		取				有			1	1	0	0	0	0		1	3
8 柏原彦太郎			取			社	有			0	0	0	0	0	0	1		1
合計										19	19	17	17	18	24	3	1	118

青森市議会史 青森市商工人名録 青森実地明細図から作成
(議員でない企業家との間の分は含まれていない)

表4は、企業家議員だけがもつ要素ネット数である。かれらの議員としての「列」のネット数も含まれている。しかし、同じ派閥の企業家でない議員との組み合わせは未だ含まれていない。したがって、派閥の要素ネット数はこれに、同じ派閥だが企業家でない、ほかの議員のもつ組合せネット数(企業家との組み合わせも含めて)を加えなければならない。

この表のもつ意味は、企業家以外の議員との人間関係を考慮に入れない、8人の企業家議員だけ同志の人間関係の濃淡の数値化である。

大坂金助は、大坂以外の6名の議員との間に19の要素ネットをもっているという事である。その内訳は、長谷川茂吉と10、伊東善五郎と3、渡辺儀助と1、小林長兵衛と3、淡谷清蔵と1、木村円司と1で、計19となる。

この中で気が付くのは、木村円司が企業家としては大坂金助のグループに属するにもかかわらず、議員として政治的には、政友会大坂派ではなく進歩党有志派に名があることである。結局、市会議員としての企業家の派閥は、大坂派は2名、淡谷派が4名、有志派は2名の計8名ということになる。

2. 議員全員が持つ要素ネット数

30名の市議会のもつ総組合せの総数は、不明の4名も含めて435通りである。その中での議員の総要素ネット数はいくらだろうか。これは、表2の不明4名を除いた26名の全派閥の合計組合せ数110と、表4の8名の企業家のもつ要素ネット数118を加えたものである。

結果は表5の示すごとく、総要素ネット数228である。その派閥別内訳は、前述の通り、大坂派が11名で93、淡谷派が10名で121、有志派が5名の14で、合計228となる。

政友会大坂派は、企業家2名すなわち、大坂金助と長谷川茂吉の派閥外の企業家要素ネット数である19と19の計38と、派閥内の11名の準ネット数（組合せ数）55を加えた93が、大坂派閥議員11名の合計要素ネットとなっている。

中立系淡谷派

表7 淡谷派議員要素ネット一覧

no	議員名 中立系 淡谷派	政党派閥						役員共通											合計要素ネット																					
		政友会大坂派	中立系淡谷派	進歩党有志派	青森電灯	青森倉庫	青森商業銀行	青森銀行	青森貯蓄銀行	青森精米	1 浅田八百八	2 池野健吉	3 大坂金助	4 大沢嘉七	5 加藤市郎	6 澤田惣兵衛	7 中島又吉	8 中西末太郎		9 長谷川茂吉	10 平井重次郎	11 安田磯太郎	12 伊藤善五郎	13 今村勝三郎	14 鎌田嘉助	15 川崎助次郎	16 小林長兵衛初代	17 淡谷金蔵	18 淡谷清蔵5代	19 中村与助初代	20 樋口喜助	21 渡辺儀助	22 柏原彦太郎	23 川口栄之進	24 原子伝次郎	25 三上栄蔵	26 木村円司	27 石館喜久蔵	28 北谷竹次郎	29 田中藤次郎
1	伊藤善五郎	中					取	取										1		0		0.5	0.5	0.5	3.5	0.5	6.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	21.5	
2	今村勝三郎	中																			0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	4.5
3	鎌田嘉助	中																			0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	4.5
4	川崎助次郎	中																			0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	4.5
5	小林長兵衛初代	中		監	取						3							3			3.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	6.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	22.5
6	淡谷金蔵	中																			0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	4.5
7	淡谷清蔵5代	中		取	取		専	取			3							3			6.5	0.5	0.5	0.5	0.5	6.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	28.5
8	中村与助初代	中																			0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	4.5
9	樋口喜助	中																			0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	4.5
10	渡辺儀助	中		取														1			6.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	3.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	21.5
合計ネット																																							121	

青森市議会史 青森市商工人名録 青森実地明細絵図から作成

中立系淡谷派は、企業家4名すなわち、伊東善五郎と小林長兵衛、淡谷清蔵、渡辺儀助の4名である。表5にあるごとく、伊東善五郎が17、小林長兵衛が18、渡辺儀助が17、淡谷清蔵が24の合計76である。この派閥の企業家ネットの数76に、派閥の議員数の10名が議員として構成する組合せ数（準ネット数）の45を加えた121が、淡谷閥のもつ全議員の要素ネット数である。表7はこれを表している。

進歩党有志派（川口派）

表8 進歩党有志派議員要素ネット一覧

no	議員名 進歩党 有志派	政党派閥			役員共通											合計要素ネット																									
		政友会大坂派	中立系淡谷派	進歩党有志派	青森電灯	青森倉庫	青森商業銀行	青森銀行	青森貯蓄銀行	青森精米	1 浅田八百八	2 池野健吉	3 大坂金助	4 大沢嘉七	5 加藤市郎		6 澤田惣兵衛	7 中島又吉	8 中西末太郎	9 長谷川茂吉	10 平井重次郎	11 安田磯太郎	12 伊藤善五郎	13 今村勝三郎	14 鎌田嘉助	15 川崎助次郎	16 小林長兵衛初代	17 淡谷金蔵	18 淡谷清蔵5代	19 中村与助初代	20 樋口喜助	21 渡辺儀助	22 柏原彦太郎	23 川口栄之進	24 原子伝次郎	25 三上栄蔵	26 木村円司	27 石館喜久蔵	28 北谷竹次郎	29 田中藤次郎	30 福士佐七郎
1	柏原彦太郎			進																																				3	
2	川口栄之進			進																																					2
3	原子伝次郎			進																																					2
4	三上栄蔵			進																																					2
5	木村円司			進	取	取					1							1																						5	
6	石館喜久蔵		不明																																						
7	北谷竹次郎		不明																																						
8	田中藤次郎		不明																																						
9	福士佐七郎		不明																																						
合計ネット																																								14	

青森市議会史 青森市商工人名録 青森実地明細絵図から作成

進歩党有志派には、企業家が2名すなわち、柏原彦太郎と木村円司が参加している。柏原彦太郎は派閥内で木村円司と1要素ネットをつくり、木村円司はこの要素ネットのほかにさらに大坂金助、長谷川茂吉と青森電灯と青森商業銀行で役員を共有、2要素ネットが追加されて5となっている。木村円司は本来、企業家として大坂派に属しているのに川口の有志派に名を連ねているのは不自然だが、事情があったのかもしれない。

30名の青森市議会議員に含まれていない企業家は、政治的に中立を求めた渡辺佐助、石郷岡善三郎、村本喜四郎、梶野伝右衛門の4名である。(企業家ネットに名があるが議員でない)

企業家ネットに載った12名のうちで市議員でないのはこの4名だけであり、あとの8名は全員、表5にあるごとく政治家議員として名前を連ねている。

4. 派閥構成比の比較

これらの表から気がつくのは、30人の議員の派閥の構成比が人数比、人数だけの組合せ比、企業家ネットを加えた要素ネットの構成比と順次に変ることである。

これは定義で最初に述べた通り、人間関係の濃さ深さが深化されて、数値的により意味のある数値へと表現されたことによる。

それにしても人数比と要素ネット比では、人間関係の中身が考慮されて、これ程にもドラスチックに変化するのである。表9がその意味を的確に表している。

表9 派閥の構成比の比較

数					構成比率 (%)				
派閥	議員数	組合せ数	企業家数	要素ネット数	派閥	議員数 %	組合せ %	企業家 %	要素ネット %
大坂派	11	55	2	93	大坂派	42.3	50	25	41
淡谷派	10	45	4	121	淡谷派	38.5	41	50	53
有志派	5	10	2	14	有志派	19.2	9	25	6
不明	4				不明				
計	30	110	8	228	計	100%	100%	100%	100%

(要素ネット数は表6、表7、表8から) 青森市議会史 青森市商工人名録 青森実地明細図から作成

大坂派と淡谷派は、派閥の「数」の上では拮抗していた状況から、組合せになるとよりその差が開いてくる。そして、要素ネットになった途端に逆転するのである。なぜだろうか。この意味は何だろうか。定義に戻って考えると納得がいく。

人数だけの場合は、30人が同じ派閥の議員という共有項をもつ集団にすぎない。派閥は三つだから、3種類の分類だけの人数比である。

これが30人の二人の組合せでは途端に、分類は435通りの組合せ数となってしまふ。30人を3種類の分類から、435種類の分類にまで一挙に細分化したことになる。

この人間関係は無意味だから、ここでは派閥に分けた3種類の人数を基本に、派閥の2人の人間関係を組合せ人数で算出している。

次に企業家ネットがこれに加えられる。議員数30名の中には8名の企業家ネット数をもつ議員がおり、彼等同志の二人の関係は議員であることを外しても、すでに幾つかの共有項をもつ要素ネットをもっている。この数字を個人毎に計算し、それに議員としての共有項をも加えて、共有項が一つ増えた数の新しい要素ネット数として算出することになる。

最後に、企業家ネットはもたないが派閥の議員としてのもつ、議員としての共有項だけの組合せ数(定義では準ネット数)と、企業家ネットの要素ネット数を加算して、個人と派閥の要素ネット数を算出しなければならない。すべての表はこの順序で計算して作成したものである。

結局、表9から、議員の人数だけの比較では、各派は11人と10人と5人の構成比率であるが、この42.3%、38.5%、19.2%の比率が、要素ネットという数の構成比と比較したとき、41%と53%と6%に変貌するのである。これは正しく、単なる「数」が「要素ネット」になると、人間関係に質的な重みと濃さを加えて、より意味のある人間関係の組織を形成した瞬間と言えるだろう。「数」の上では上位だった大坂派が、要素ネットに変じた途端にその地位が逆転され、淡谷派の下に位置したことがよくこの意味を示唆している。

なぜこれが生じたのか。「数」の大坂派は「要素ネット」になるとその値を減じ、逆に淡谷派はその値を大きく伸ばし、2番手だったにも係らずトップにしかも大差で躍進したのである。その分、有志派が大きく陥落することになる。

これを表5が物語っている。大坂派の企業家は2名であり、大坂金助と長谷川茂吉ともに要素ネット数は24の合計48だが、淡谷派の企業家は4名であり、伊東善五郎と渡辺儀助ともに21.5、それに小林長兵衛の22.5と淡谷清蔵の28.5の4名の合計が94と、ネット数の上でも大坂派の2名の何と倍近くなのである。この企業家同士の「数」と「関係の深さ」が、双方を逆転してこれだけの差を齎したと言えるだろう。

おわりに

明治初期から中期へかけての政治家の資料は、企業家のそれと比べるとまだ恵まれている。市町村に各市町村史があり、行政のことが産業経済よりも優先されているからである。しかし、政党派閥や個人の数値化となると、企業家のそれよりも難儀である。なぜならば、共有項の数も抽象的であり漠然としており、経済行動のように明確でない。

そこで、定義も拡張した解釈で数も増やし、本稿のように一つの共有項でもなんとか組合せを基本に拡大解釈して、質的な数値での把握を心掛けた次第である。

先行研究の「要素ネット」概念は研究者も少なく論文もほとんど無い。より研究手法を向上させるためには、この優れた概念である「要素ネット」の本質を基盤に深化させ、この概念そのものを研究対象に工夫するしかない。

ここでの応用研究は、私の独自の解釈と本質の把握から成り立っている。どうぞ、諸先生方の率直なご意見とご批判を拝聴したいと思っている。歴史研究の方法論として、より柔軟性をもった応用方法論となることを祈ってやまない。

脚注

- 1) 青森市議会史 p.362
- 2) 「青森市議会史」p.263

参考文献

- 論文「明治、大正、昭和初期の企業家ネットワークの研究」南勉 2013年
論文「人間関係の数値化と視覚化についての考察」南勉 2014年
『青森県議会史』青森県議会史編纂委員会青森県議会、1974年
『青森市史』青森市史編纂室青森市、青湾印刷社、1958年
『青森市議会史』青森市議会史編纂委員会編 1986年
『青森銀行史』青森銀行史編纂室編青森銀行、1968年青森市議会史
『青森県統計書 1897 明治30年上下』青森県編 出版年 1887年

- 「青森県統計書 1907 明治40年上下」 青森県編 出版年 1907年
「青森県統計書 1929年 昭和4上下」 青森県編 出版年 1929年
「青森県総覧 青森県四十年略史」 東奥日報社編 昭和3年刊
『笹森儀助書簡集』 東奥日報社 2008年